

# 全電源喪失の記憶

証言 福島第一原発

■第一章「3・11」

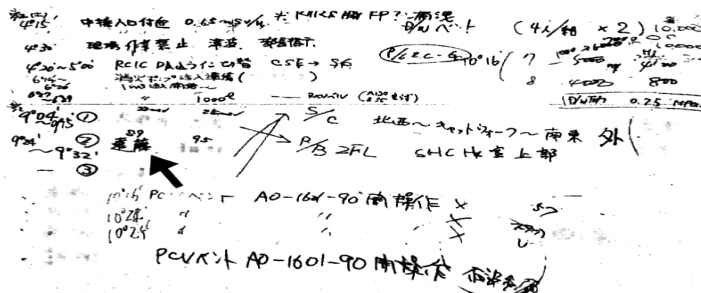
15

3月12日未明、福島第一原発1号機中央制御室の運転員たちは疲労していた。床でひざを抱える者、脚盤前に横たわる者。しんと静まった制御室が時折、大きな余り揺れる。

「1号機の格納容器圧力ががんががっていたので、壊れる前に圧を下げる必要がある。ベントしかいてみんな意識していました」  
IF業管理グループの大野光幸(51)があの消えた2号機の制御盤側いた。ベントは放射性物質を含んだ空気を格納容器から放出する作業誰かが放射線量の高い原子炉建

## 苦渋の決断

# ベントに行ってくれ



2011年3月12日早朝、遠藤当直長が中央制御室のホワイトボードに書いた1号機ベント突入チームの編成。中段左に第2班の遠藤当直長の名前(矢印)がある(運転員提供、画像の一部を加工しています)

屋に入って弁を開けなければならぬ。い。

その時、当直長席の伊沢郁夫(52)の前にあるホットライン(専用電話)が鳴った。相手は免震重要棟の発電班副班長野口秀一(54)だった。

「指示が出た…。ベントに…行ってくれ」

突入チームを選ぶよう求める電話だった。伊沢と同期入社野口は胸を締め付けられる思いだった。放射線物質を外に出してはいけないと教え込まれる運転員にとって、ベントは「自殺行為」と言えた。

「電源がなくなると制御室では弁の操作ができない。あとは現場に人

を出すしかなかった。伊沢君はつらかったと思います。でも吉田所長も私も伊沢君も命令するしかなかった。苦渋の決断というのはこのことを言うんだと思いました」

黙って電話を聞いていた伊沢が受話器を置き、立ち上がった。

「集まってくれ」  
ゆっくりと集まってきた運転員たちの視線が伊沢に注がれていた。「ベントの指示が出た…。申し訳ないが…誰か行ってくれないか。まず俺が行く」

皆、無言だった。  
「伊沢君はここに残って仕切ってくれなさい、駄目だ」  
声を上げたのは応援に駆けつけた当直長たちだった。彼らは一人、また一人と手を挙げ、突入チームに志願した。

大野も右手を胸の辺りまで挙げか

けた。だがそこから上はどうしても挙がらない。右手は結局、下ろした。「怖かったです。申し訳ないとは思いました。でも原子炉建屋に入ることには半端じゃない被ばくをするってことです。死ぬかもしれない。家族のことも頭をよぎりました…」  
当直長席の傍らでは、応援のE班当直長遠藤英由(51)がホワイトボードに突入チームの編成を書き込んでいった。

格納容器外側の弁を開ける第1班はE班副班長ら2人に、格納容器下部の圧力抑制室まで行く第2班は遠藤とC班当直長になった。さらに方が一に備えた第3班を加えたチーム編成が決まり、あとは突入命令を待つだけとなった。

(敬称略。年齢、肩書は当時。共同通信 高橋秀樹)

第一章おわり